

AI と安心感

佐倉 統

日本学術会議特任連携会員／東京大学大学院情報学環／理化学研究所革新知能統合研究センター

新奇技術に対して人々から賞賛と忌避の相反する感情が向けられることは、昔からよく知られている。SF 作家のアイザック・アシモフが「フランケンシュタイン・コンプレックス」と呼んだ現象だ。人工知能 (AI) も同様の社会イメージ (public image) で受け取られているし、その傾向は今後もしばらくは変わらないだろう。

だが、新奇技術とひとくちに言っても、その特性によって社会イメージは様相が異なると考えられる。この発表では AI に対する社会イメージの特性を考察し、不要な不安感や過度の排除を緩和するための概念装置としてテクノアニミズムが有効であるという仮説的展望とその際の注意すべき点について述べる。

「AI」という用語の社会イメージはかなり多義的で、「ふわふわ」と使われている。特定の技術や手法と結びついてはおらず、ぼやっと広がっている、つまり様々な受けとめられ方をしているというのが実態である。専門家に聞いても、自分を「AI の専門家」と自己認識している人は多くない。専門領域はあくまでも機械学習だったり言語処理だったりである。

そもそも AI は、色も形も匂いもないソフトウェアである。それが「何であるか」をイメージするには、なんらかの具体的なアイコンと結びつけてイメージする必要がある。AI だけを独立させて人間との関係を論じたりデザインしたりすることは、とても難しい。

AI がどういうアイコンと組み合わせになりやすいのか、そして、そのアイコン (+AI) に対して人はどのようなイメージを抱くのか、今後の実証的な研究が必要だが、一般的な文脈では AI はロボットとセットで語られることが多い。この認識が正しいとすれば、「AI を搭載したロボット」と人間関係をどうデザインするか、というのが「AI と安心感」を考える際の中心的課題になる。

では、AI を搭載して高度な知能をもったロボットについて、人はどのようなリスクを感じるだろうか。主観的リスク認知を決める要因は「新規性」と「恐ろしさ」が主たる因子であるとされる。AI／ロボットの「恐ろしさ」はロボットの機能や見た目により変化するが、その「新規性」は一貫して高いと推測される。つまり、AI／ロボットは存在自体が高リスク認知をもたらす可能性が高い。

この点を緩和して AI／ロボットに対する根拠のない不安感を低減させるためには、「テクノアニミズム」が有効ではないかと私は思っている。機械などの人工物に生命的な要素を読み込む感覚や態度のことである。しかしこの概念には理論的な曖昧さや日本の国粋主義的発想と結びつきやすいなどの欠点も多い。それらの欠点を軽減し、テクノアニミズム概念をバージョンアップするためにはどうしたらよいかを論じる。